

## 追悼 小澤 進 先生

本誌の「国際課税のケース・スタディ」欄を長い期間担当された小澤進先生が平成17年3月末に逝去された。謹んでご冥福をお祈りしたい。私は、小澤先生から長い間にわたり国際税務のご教示を受けた関係にあるので先生の敬称を付すこととお許し願いたい。本論は、このような個人的な話ではなく、国際税務分野における小澤先生の業績を紹介するものである。

### 1 略 歴

小澤先生は、昭和30年に国税庁税務講習所東京支所に入所され、その後市川税務署を振り出しに江戸川、千葉、浅草、神田、日本橋の各税務署で勤務し、その後昭和45年から昭和46年にかけて税務大学校本科研修を受け、1年間の東京国税局調査部勤務の後、昭和47年から約7年間大蔵省主税局国際租税課に勤務した。この主税局国際租税課時代に、当時、やはり国際租税課に勤務されていた故小松芳明氏（後に亜細亜大学法学部教授）の薫陶を受けて、国際税務、特に租税条約に関する知識を蓄積されたと小澤先生から伺ったことがある。

小澤先生は、主税局勤務の後、昭和54年に転勤で東京国税局調査二部外国人調査部門の総括主査となり、その後、国際調査専門官を経て、3年間の税務大学校教授勤務を経た後に退官されて、中央クーパーズ・アンド・ライブランド

国際税務事務所顧問（後にパートナー）に就任している。

小澤先生の経歴で先生なりの国際税務に関する考え方を形成した時代は、既に述べたように、主税局勤務時代であり、昭和54年以降は、具体的な実務の中で次第にその知識が練られてきたということであろう。租税条約を締結するという経験のない筆者が、平成9年に出版した『租税条約の論点』（中央経済社）の第1章の租税条約の締結の項を書く際に、実際に租税条約交渉の経験のある小澤先生にその交渉の手順等を教えて戴いたことがある。

### 2 著 書

小澤先生が最初に単独で書かれた本は、平成元年3月に出版された『Q&A 租税条約の実務』（財経詳報社）である。この本は、租税条約の理論部分とケーススタディの二つの部分から構成されている点に特徴がある。特に、この本に掲載されたケーススタディは、本誌『税務事例』に連載していたものに若干手を入れて構成したもので、その全体としての労力は相当である。この本は、三訂版まで出版され、平成12年に私との共著のスタイルで『租税条約のすべて』（財経詳報社）となり、平成16年には小澤・高山・矢内の共著で『Q&A 租税条約』（財経詳報社）になり現在に至っている。この

# Topics of International Taxation

うち、『租税条約のすべて』がOECDモデル租税条約等をベースにして逐条解説をしている点で他と異なるが、いずれも理論とケーススタディという構成は不変である。

小澤先生は、この『租税条約の実務』の前に、昭和54年11月に、五味雄治氏と共著で『日米租税条約逐条別解説』を社団法人日本租税研究協会より出版している。この本は、日米租税条約に関する文献がない時代（平成元年に小松芳明編著『逐条研究 日米租税条約』（税務経理協会）が出版されるまでの間）、大変貴重なものとして多くの人に読まれた本である。

また、私なりに貴重な文献であると思っている本がある。それは、小澤先生が主税局時代に分担執筆されている『タックス・ヘイブン対策税制の解説』（高橋元監修、清文社、昭和54年）である。後に、小澤先生は、自著『国際課税』（単著4冊目、中央経済社、平成6年12月）においてタックス・ヘイブン対策税制を解説されているが、移転価格税制に比べて、タックス・ヘイブン対策税制の解説は少ないのである。

小澤先生の単著2冊目は『国際税務ガイドブック』（財経詳報社、平成2年初版、平成16年六訂版）である。この本は、『Q&A 租税条約の実務』が少し難しいのではということから、やさしい国際税務の本として企画されたものである。

ここまで掲げた以外の単著は、第3冊目となる『非居住者の税務事例』（中央経済社、平成4年）である。この本は、非居住者の税務に関するQ&A形式のものであるが、われわれ仲間内では隠れた名著と呼んでいる。平成4年当時、

非居住者関連の本が数冊出版されたこともあって、この本は出版のタイミングが悪かったとしかいえないものである。

ここまで以外に、私との共著で『国際税務要覧』（財経詳報社、平成3年）がある。この本は、157カ国の税制の紹介と用語の解説であるが、157カ国の税制の原稿を書いた私にとって思い出の1冊である。

### 3 租税条約に関する考え方

昔、ある著名な研究者が晩年に著書を公刊した際に、欧文図書の引用があまりに少ないのでいかがかという評があったと聞いたことがある。しかし、実務等を通じて練れた考え方ができる場合、文献の引用の有無でその文章の評価が決まるという基準はないといえる。

むしろ、実務家が読む本では、細かい引用はうるさい感じがするものである。

私が読んだ小澤先生の文章では、『三訂版租税条約の実務』（財経詳報社、平成7年）の「第1部 租税条約」が大変勉強になるものであると考えている。この本をお持ちの方はお読み戴ければ分かるが、この文章は別に難しいことを説明してはいないが、その背景には長い間に熟成したものが垣間見える実に柔らかな文章である。私はこのような文章を書くまでに長い時間が必要であろうと思えてならない。

中央大学商学部教授

矢内 一好